

文献センター通信

第22号
2013年3月30日
一部100円

所蔵文献紹介「雑誌『アナキー』展」5月開催

当文献センターの所蔵文献をご紹介する展示イベントを今後開催していきます。その第一弾として、「雑誌『アナキー』展」を5/17(金)から26(日)までの10日間、東京新宿のイレギュラー・リズム・アサイラムにて開催いたします。

雑誌「アナキー」(ANARCHY)は、1961年〜1970年までロンドンのフリーダムプレスから発行された雑誌。主にルーファス・セガーがアートディレクションを務めた表紙を中心に展示する予定。また期間中、ルーファス・セガーのインタビューが掲載されたパンフレット等も頒布予定です。

なお、今後の予定としては、大杉の日本脱出を助けたことでも知られるエスペランティストであり、アナキストでもある山鹿泰治(1892〜1970)の関連資料や写真アルバムなど紹介する「山鹿泰治の世界(仮)」を年内に。来年には、戸田三三冬氏のご協力により2011年に当センターに所蔵された日本アナキストクラブ(1951年に水沼辰夫らにより結成)の資料を公開する「日本アナキストクラブ展(仮)」を開催する予定です。

主な内容

「雑誌『アナキー』展」開催	1
矢野寛治講演要旨(下)	2
追悼・堀切利高さん	4
新宿図書室所蔵文献書評第一回	5
タリン・パデイとカレンダー交換	5
新宿図書室所蔵文献目録	7

【雑誌『アナキー』展】実施概要)

▼日時：5月17日(金)〜26日(日) 13時〜20時(月水を除く)
▼場所：イレギュラー・リズム・

アサイラム(地下鉄丸の内線「新宿御苑前」駅より徒歩5分)
▼入場料：無料
▼主催：アナキズム文献センター/イレギュラー・リズム・アサイラム

▼問い合わせ：03-33352169(イレギュラー・リズム・アサイラム) 13時〜20時※月水除く



雑誌『アナキー』の表紙

講演 矢野寛治

伊藤野枝と代準介と千代子(下)

構成・編集部

(大杉と野枝が殺されたという)電報が入り、代準介はすぐ東京に入ろうとしますが、戒厳令下のために東京には入れません。そこで福岡県警で証明書を取ってから東京に入ります。この上京について、瀬戸内さんほかいろいろの方が(野枝の)父親の亀吉も行ったと書いていますが、同行していません。代準介だけでした。これは当時の大阪朝日新聞にも書かれています。東京では手に入らないということで大人用2つと子供の棺桶を買って東京へ行きます。ただ東京へは名古屋から先は(東海道線では)動きませんが、名古屋から中央線で新宿のほうまで入ることになります。この間のことについて、新聞では大阪で子供のためのお菓子を購入したと書かれています。

代準介が来るということで新宿駅では特高の車が迎えに来ています。これについて私は、頭山満が裏から動いたのか思っておりましたが、そうではないようで、特高としては福岡県警から

も言われているし、便宜上用意したということですが。新聞には、当時の東京の各新聞社が6、7台の車でその後ろをつけて回ったと書かれています。新聞社が、特高が車を動かさないときは自分たちの車を使ってくれと提供してくれたと書いていますので、(代準介は)頭山満の子分ではもちろんあるけれど、当時はそこそこの名前が売れていたのだと思います。そうでない限り、新聞社が各社1台の車を出そうなんてことはないでしょうし、常に特高が警護しているなんてこともなかったでしょう。

(遺体の安置場所に)訪問した日には遺体を引き取れないので、頭山とか三浦観樹陸軍中將とかその辺を動かして遺体を引き取るということをやります。遺体を引き取り、茶毘にふして、そして遺骨を大杉家と分けて、中仙道經由で遺児たちを連れて帰るのですが、当時の湯浅警視総監は非常に憲兵隊に対して怒っていたんですね。どう

も警視総監の文言を読むと大杉さんは嫌いじゃないらしいんですが、憲兵隊がなぜ勝手に殺すのだということを後藤新平内務大臣に対してクレームを出すんです。これが閣議で問題になって、それで軍が発表するわけです。本当は永久にわからないようにしていたんです。それで問題になって、佐野眞一さんが『甘粕雅彦伝』でお書きになりますが、甘粕以下、5人がやったんだと。

九州に遺児を連れて帰るときですが、長野県塩尻までは警視庁の刑事が3人つきました。この際、赤子(長男ネストル)を抱いていたほかに魔子(真子)とエマ(笑子)がおり、代準介のほかにはお手伝いさんと叔母の坂口モトと神戸の大杉の弟進がいました。何が大変かと言うと、行くところ行くところ新聞記者がきてインタビューされたということですが。

当時、野枝は(代のことを)叔父と書いていましたが、父親だと思っっています。というのも、(実の父親)亀吉はなかなかハンサムだったので、ご婦人問題が多くて、よく逐電しているんですね。ですから、家にいないんで

す。だから代準介を父親だと思っただけです。虐殺のあと全国から40、50通の手紙が来たことが(牟田乃落穂)に書かれています。そのうち、5通くらいは「国賊」と言うことで批判的な手紙もありましたが、残りの40数通については、幼い子まで殺す憲兵隊について許せない、涙が出るという手紙でした。日本中、代準介を野枝の父親と思っていたようで、「福岡県福岡市 大杉の妻の野枝の父 代準介」宛て郵便が届いていたんです。これをみても彼は育英にお金を相当かけて、多くの貧しい子を東京に出し、学問させていました。野枝も小説に(代の悪口を)書きましたが、ずっと金銭面では頼ったり、お金がないときは頭山や杉山茂丸のところに行ってお金を借りたりしていました。ところが様々な研究者はその事実を飛ばして、ただ彼らに会ってお金を借りているという事実しか書いていない。二十歳近くの野枝が突然、頭山や後藤新平に会えるがわけがない。それは調査不足です。代は(野枝が)上野高女時代から霊南坂の頭山の家にいつも連れて行っておりまして。実の娘である千代子はもちろんかわいいが、野枝もかわいいと思っていました。野枝は宝なんです。誇りなんです。二十歳

で『青鞥』の編集長をはるってことは、なかなかよくやっているなど。だから、姪っ子ではあるけれど、娘みたいなものだ、自分の関係筋に紹介して回っています。だから（野枝は）頭山の縁も頼れるんです。その視点が研究者たちにはありません。

（3人の）葬儀についてですが、在郷軍人会を始めとする様々な右翼が反対したなか、代は動きました。まず警察関係で全部許可を取ります。遺児たちについては、伊藤家で4人の面倒は不可能なので、魔子は代家が引き取ります。東京の葬儀の時には（大杉の仲間たちから）魔子を連れてきてほしいと言われて、警察の許可を取り、代準介は魔子を連れて上京します。魔子は当時のアナキストたちのアイドルだったんですね。

九州へ連れて帰った遺児たちは無戸籍でしたので、代が市役所関係に掛合って戸籍の復活をします。悪魔の子の「魔子」ではまずかろうということ、で真実の「真子」に変え、「エマ」は笑う子の「笑子」にして、「ルイズ」は「留意子」に。ネストルは父親が殺されたので父親の名前をそのままつけようと

「栄」という改名作業をします。これもなかなか大変な作業でした。葬儀のときも右翼や在郷軍人会などが反対しましたが、無事に実施できたのは、当時福岡で実力があつた水平社―そこには松本治一郎という大物がいました―が周辺警備をしました。いまでも福岡は水平社が強いですが、その水平社が防衛に入るとなかなか在郷軍人会でも反対するのは無理です。それにより葬儀は実施できましたが、世間はなかなか大杉と野枝に関して冷たかったので、新聞はほとんど甘粕をほめるんですね。謹厳実直で兄弟想い、家にも仕事に送りしているような立派な人と。逆に殺された大杉らは輪をかけて叩かれた感じがします。

代準介は、三菱造船関係の仕事と杉山茂丸と組み、今宿や博多の港湾を作ったり、博多駅の移転させる問題―悪く言えば土地転がしですが―など様々なことをやっています。堅気っぽくはない。ある意味で「政商」「山師」などころがあります。最後は大勝負に負けました。杉山茂丸と組んで比延に博多駅を移転しようとしたが、失敗。5万坪がふいになり、素寒貧になりました。

野枝は全集4巻が出ておりますが、10年間にこれだけの原稿を書くのかというくらい書いています。もし彼女が虐殺されずにいたら、戦後の第一回総選挙は、因縁の神近市子と一緒に赤絨毯を踏んだであろうと思います。ライバル論といえば、やはり千代子がライバルでした。（上野高女を卒業し）

一番のライバルが神近市子でした。神近は津田塾へ予科にいかず本科に入っているくらいの相当の英語力のある頭の良い人だった。学歴がない身として、そのなかでのしていくには、辻潤の英語、大杉の思想を身に付けていくしかなかった。

大杉と一緒に、ライバルに打ち

『青鞥』に入りましたが、『青鞥』には津田塾、日本女子、御茶ノ水―当時すでに四年制大学―を出たような人間がずらりと揃っています。九州の貧乏人の子がなんとかして上野高女を卒業して入っていったら、千代子どころでないライバルがずらつといた。このライバルたちに負けるもんかとなりました。この中で



代準介の自叙伝『牟田乃落穂』を手にもつて講演する矢野さん

勝っていくと登場してくるのは日本矯風連盟とかです。野枝が本当にやりたかったことは、女中さん、女郎さん、女工さん、この3つの非常に大変な仕事に携わる人たちのために論を張ってやっていきたいと行動していくことでした。矯風連盟などの良家のお嬢様の上の立場から「あの子たちを助けてやりたいいわね」という姿勢と対決してきました。野枝にとって、まやかしの人助けなどというものはありえないと。

この本(『伊藤野枝と代準介』)の執筆にとりかかるとき、野枝の全集読んだりしているうちに、最後はよく闘ったなど非常に惚れました。あとがきを脱稿したのが、9月16日、まさに殺された日でした。大杉もそのようにして惚れていきました。私はあまりアナキズムに対して好意的ではなかったのですが、そのようなことではなく、労働者もつとよい暮らしができるようにというのが大杉の考えであり、野枝は貧しい女たちがどのようにしたら苦界から抜け出せるのか、その一点だけでしたから、「左翼だ」「アカだ」「共産主義」だということは関係ない。玄洋社の頭山滿にも様々な間違いはあったかもしれないが、どちらも道は違えど

もがんばった人間たちだと思います。

質問

◇代準介が遺児を引き取ったあと、右翼の妨害などがあるなかで頭山との関係や商売などにはどのような影響があったか。

影響はありました。それまでは県警本部が代のところと相談にきて物事を解決したりしていたこともありましたが、この事件以降の代の立場は社会的に弱くなっていっていきます。商売にも影響したでしょうが、代にとっては何ともなかったようです。また、隠忍自重して東京の渋谷(頭山邸)にも行っていかなかったようです。というのも、殺された後に行つたところ、右翼がい甘粕嘆願の署名を書けと。そんなことができるわけがない。自分のかわいい娘が殺されたようなものですから。そこを立ち去ることなどが(『牟田乃落穂』)にたくさん書かれています。またあるときは、(監獄の)甘粕に差し入れをする連中の車に頭山が乗り、「おまえも乗っていけ」と乗りはするんで

すが、監獄の前で降りて帰つた場面もあります。その10年後に、頭山からあのときは呉越同舟みたいで悪かったなと言われたというようなことも書いています。

代本人は玄洋社に名を残しませんでした。『牟田乃落穂』で明快に書いているのは、左翼のほうが知的で品格があったと。みんながやさしく立派だ。(3人の)遺骨を引き取りにいったとき、内田魯庵以下、仲間たちが大杉と野枝の家に集まり、今後の対策について話し合っているときも、みんな品がいいと。それに比べると玄洋社に集まる右翼は品が悪いと書いています。彼のなかでは兄貴として頭山に憧れてきたけども、様々な人と会つていくうちに、社会主義者といわれた人たちのやさしさや知性、教養、品格というものがわかつてきたようです。

◇当日は写真を見ながら話をするといふスタイルであったため、講演をまとめるに当り編集部で再構成いたしました。そのため責任は全て編集部にございます。ご了承ください。

追悼・堀切利高さん

昨年暮れの12月16日、平民社資料センターの代表で、初期社会主義研究会の中心であった堀切さんが亡くなられた。ご冥福をお祈りします。

〔略歴〕堀切さんは1924(大正13)年10月23日生まれで88歳。浅草雷門前の広小路にあった旅館「柳屋」の長男として生まれ、田原小・府立三中(現・都立両国高校)・第一早稲田高等学院を経て、早大理工学部応用科学科卒業、都立高校で化学などを教える傍ら、法政大学の日本文学科で小田切秀雄のもとに学んで、国語教師となる。

1977年西田勝らとともに大正労働文学研究会を設立、83年には絲屋寿雄、若月隆二、成田龍一、山泉進らと初期社会主義研究会を立ち上げ、大逆事件の真実をあきらかにする会に参加、85年日本社

会文学会の結成に与かる。以後、86年に創刊された『初期社会主義研究』の編集長として(22号まで)研究会の活動に尽力した。

晩年の荒畑寒村と親しく交際し、寒村会の主要メンバーとして寒村の仕事を集大成させた。明治・大正の社会主義研究のほかに、童謡や児童文学にも造詣が深い。

編書『荒畑寒村著作集』全10巻
平凡社 1976～1977年

『宮地嘉六著作集』全9巻 慶友社 1984～1985年

『春雪ふる 荒畑寒村戦中日誌』
不二出版 1993年

『谷中村滅亡史』 岩波文庫
1999年

『伊藤野枝全集』全4巻 學藝書林
2000年

『堺利彦』(平民社百年コレクション)
論創社 2002年

著書『夢を喰うー素描荒畑寒村』
不二出版 1993年

『浅草東仲町五番地』 論創社
2003年

**〔連載〕新宿図書館所蔵
文献を書評する第一回**

『日本を震撼させた日染煙突
争議』著 白井新平 / 発行 啓衆新社
/ 1983年12月20日発行

張本勲

本書は、満州事変前夜の1931年、工場煙突上での320時間にも及ぶハンスト闘争を軸にした日本染絨争議の記録である。

ページを繰るとまず、「餓死同盟」それはなんだ」とくる。ああそうか、ハンストか。ハンストを戦術とする争議も今は見ることがないが、日染争議では300人近くが工場を占拠してのハンストであった。

冒頭で「この闘いは人民の生きんがための自発的なやむにやまれない、その創意によって遂行された」「イデオロギーによって触発され指導されたものでもない」「民衆の歴史がかかれなければならない」

いという。だが、歴史の書き手はみな右・左、いずれにしても文人だ、知識人だ」「人民は自ら書くすべもなく、ヒマもなく、ただ行爲を残して消えてゆく」と、その無名性の誇りを高らかに宣言するが、その後の著者の記述は強い自己愛に満ちたもので、毀誉褒貶が分かるるところであろう。

また、時制が錯綜し、純正批判が随所にちりばめられているが、それでも日染争議の解放感は伝わってくる。

筋目を通すことと現実的な選択は時に鋭く対立するが、妥協的だと後ろ指を差されることを恐れないサンジカリストのプラグマティックな力強さが滲む。

後半の「江西一三自伝刊行会に際しての座談会」や、一次資料の「日染争議資料」の再録は貴重なもので、闘いの記録の奥行きを与えている。

インドネシア・ジョグジャカルタの美術グループ「タリン・パデイ」とカレンダーの交換

成田圭祐

今年1月中旬にインドネシアを旅した。ジャワ島中部のジョグジャカルタを訪れ、以前から連絡を取りあっていた「タリン・パデイ」というアート・グループのメンバー達に会いに行った。

「タリン・パデイ」は、スハルト軍事独裁政権が崩壊した1998年、民衆のための芸術組織としてジョグジャカルタで結成されたグループである。元美術学校を占拠して、美術学校中退組、演劇人、詩人、パンクやテクノ系ミュージシャン、彫り師など有象無象の共同生活をしながら、主に木版画によってインドネシアで起きている環境問題や社会問題を伝える作品制作をはじめた。

拠点を占拠スペースから別の場所に移した2000年代初頭から、

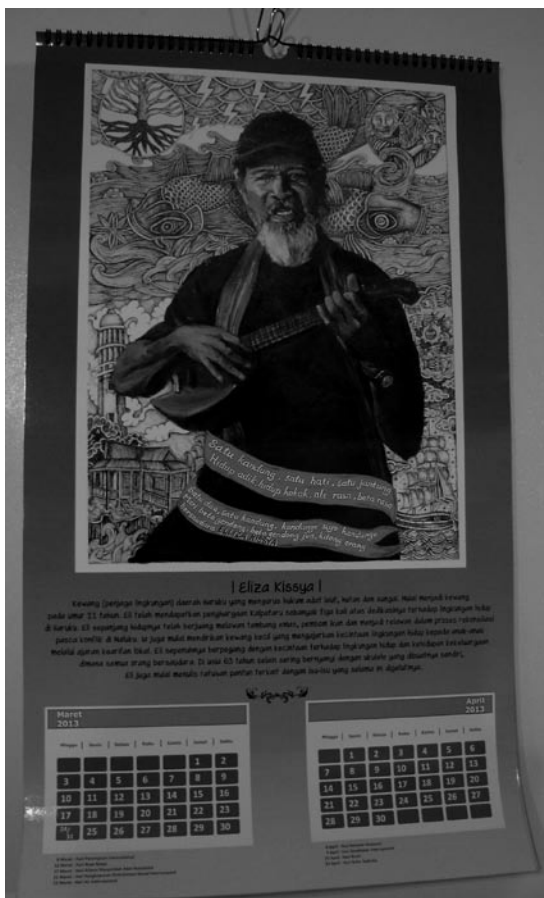
美術界からも高く評価されるようになった「タリン・パディ」だが、地元の子供たち向けに、版画を教えるワークショップや人形劇を開催するなど、地域に根ざした民衆のための美術活動を今でも続けている。

街の中心地からオートバイで15分ほど離れた、緑の生い茂る中に建てられた、かれらの現在の拠点にも招待してもらい、木版画はもちろん、デモや抗議行動で使用するバナナや立体のオブジェなど、

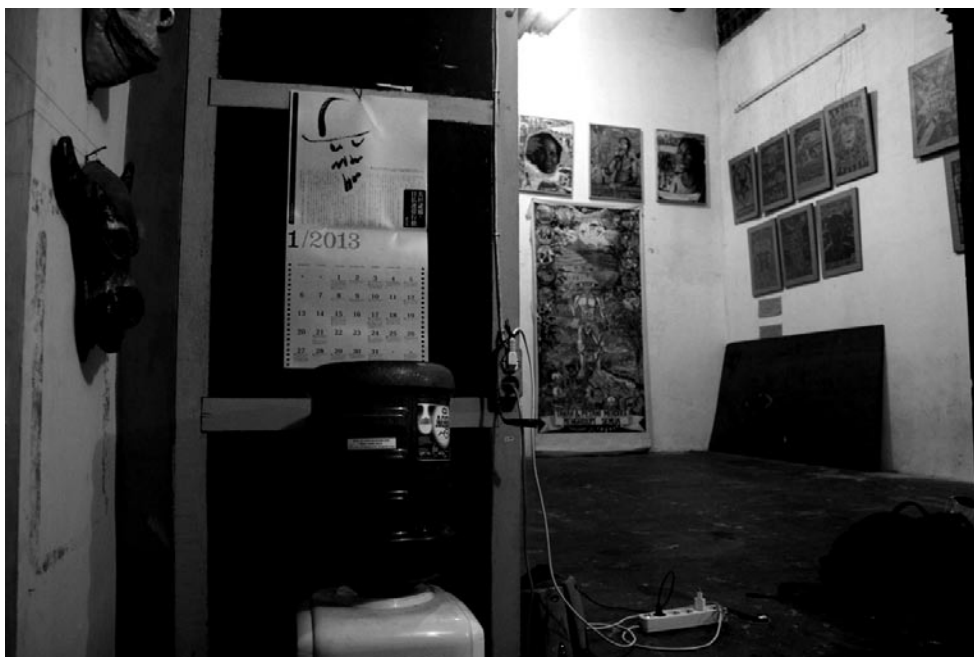
かれらがグループを結成してから15年のあいだに制作してきた作品を、ひとつひとつ丁寧に解説してもらいながら鑑賞することができた。

アナキズム文献センターのカレンダーをかれらに進呈したところ、とても喜ばれ、その返礼として贈ってくれたかれらのカレンダーは、急速に進む開発や天然資源の採掘によって土地を奪われつつあるインドネシアの先住民たちの肖像画が描かれたものだった。

このカレンダーは、文献センターの新宿図書室で閲覧できる。



タリン・パディのカレンダー



タリン・パディのアトリエに飾られたアナキズム文献センターのカレンダー

議事録

【1月運営委員会】1/15(火)

◇2013年カレンダー販売。来月頭には取り扱い店舗から引き上げ打診(各担当)、「イメージが重い」「虐殺という言葉のイメージ」「早く出来た割には営業計画がなかった」

「意気込みと書店との考えの乖離」

◇通信について。次号は3月発行、発行体制を各自責任体制へ↓1人1ページ以上の原稿を受け持つ

◇情報発信について。Webでの積極的な情報発信↓通信内容との連携どこまで報告などはWeb先行アップでもよいのでは。読み物は紙のみで。

◇2013年の抱負。年間を通じて展示等(ポスター展、雑誌アナキー展、アナキスト・クラブ展、山鹿泰治展のほか、ビジュアル資料の整理・公開)

【2月運営委員会】2/14(木)

◇新宿図書室。まもなく「クロハタ」整理終了。機関紙にメド。「図書室目録」は全体の文献目録の備

考欄にでも記入。今後は雑誌のダブリも補充していく

◇次回通信3月末発行(締め切りは3/10)

◇年間計画定期イベントを開催する。5月↓「雑誌アナキー展」5/17(金)〜26(日) ※目録ほか含むパンフ資料作成(Signal所収文章を翻訳)

※誌面コピーサービスもテスト(今後、文献センターの収入源ともなりうる)。時期未定↓「山鹿泰治の世界」(写真アルバム、手帖、スケッチブック)

※開始までに目録まとめ。来年↓アナキストクラブ資料展

◇90周年企画連携。各地の90周年企画の情報を収集して、Webに掲載するなど情報共有をする

【3月運営委員会】3/12(火)

◇通信発行、3月末日で。

◇海外から、ストックホルムからカレンダー受信の連絡あり。サンフランシスコアナキズムブックフェアにもカレンダー

↓写真をもたえないか打診

◇来年カレンダー、ギロチン社の映画と協同。お互いのメリットを

活かして中途半端にならないように



寄贈書

田代学さんより段ボール18箱の資料が寄贈されました。きちんと整理された状態ですので、リスト作成はあまり手間取らないと思います。とは言っても分量があるのでしばらく時間はかかりそうです。まとも次第、紙面でご報告します。

◇編集部からお知らせ

文献センター通信は2013年からは、通常どおりの3、6、9、12月の発行(年4回)に戻ります。

アナキズム文献センター通信第22号

発行/2013年3月30日

発行所/アナキズム文献センター

編集/運営委員会

連絡先/東京都新宿区新宿

1-30-12-302

郵便振替口座/

0085013130010

口座名 A文献センター

Eメール/info@cira-japan.net

定価/一部100円